



連載

命を紡ぐ 現場の声

なぜ「がん哲学外来」で人生の目的が見つけれられるのか

ライフ 2016.10.8

一般社団法人がん哲学外来理事長 樋野興夫
取材・構成＝田中響子

PRESIDENT Online

1 2 次のページ >

人はがんを告知されると、大きなショックに見舞われます。自分の人生を振り返り、むなしく思ったり、落ち込んだり、思い悩んだりすることも珍しくありません。人生での自分の役割や、生きる目的を見いだしてもらい、がん患者さんやご家族に元気になってもらおうと「がん哲学外来」を発足した発起人の樋野興夫先生にお話をお伺いしました。

「がん哲学外来」で心の隙間を埋める

「あなたは何のために存在するのですか」

「どうすれば残された人生を充実させられると思いますか」

「今までどんな生き方をしてきたかは、どうでもいいじゃないですか」

「自分以外のものに関心を持つと、やるべきことが見えてきますよ」

これらは、私の元に相談に来られたがん患者さんに対して私がかけた言葉です。8年以上、がん患者さんやご家族と対面してきて、私が感じていることは、皆さんからの相談は圧倒的に人間関係の悩みに占められているようだということです。

おそらく、健康なときは日々忙しくて、そんなことに気にすることも特に考える機会もないのでしょう。ところが、「がん」を宣告された途端、突如として人間関係が問題として浮上してくるのです。

お医者さんから心が傷つくような厳しいことを言われたり、ご家族から思いやりが欠けることを言われたり、態度をとられた……など、多くの患者さんが、口に出せない辛い思いを経験されていますね。自分ががんだとわかっただけでも十分ショックが大きいのに、それを癒やしてもらえない状況にいる人が実に多い。多くの人が“温かい他人”を求めているように感じます。

そんな人々の心の隙間を埋めるのが、この「がん哲学外来」です。始まりは2008年、順天堂大学病院です。その後、あまりにも全国から人が集まるので、大学病院の外に出して、全国的に展開を開始しました。今は日本全国、約90カ所で展開しています。



種野興夫・一般社団法人がん哲学外来理事長

「がん哲学外来」で私がやりたかったことは患者さんとの対話でした。患者さんたちは圧倒的に対話が不足しています。自分の不安な気持ち、どうしていいのかわからない心細さ、悔しさ、悲しみ、それらを受け止めてもらえる場所がないのです。そうした気持ちを自由に口に出せる場を作りたかったのです。

次ページ
人生の目的や使命を見つけ出す >

1 2 次のページ >

SNSでこの記事シェア



このページを印刷

PR

まずは覗いてみませんか？年収2,000万円以上の求人特集

世界で最も注目度の高い新しいドメイン「.shop」がスタート

「第4次産業革命」に直面する企業と地域。今ギアチェンジが求められている。

女性の活躍を応援。日本一働きやすい会社を目指す

ビジネスマン必見！千円で学べるeラーニング講座開設！



連載

命を紡ぐ 現場の声

なぜ「がん哲学外来」で人生の目的が見つけれられるのか

ライフ 2016.10.8

一般社団法人がん哲学外来理事長 樋野興夫
取材・構成 = 田中響子

PRESIDENT Online

[< 前のページ](#) 1 2

自分の人生の目的や使命を見つけ出す

「がん哲学外来カフェ」では難しいことはしません。がん患者さん、患者さんのご遺族、友人ら、さまざまな人が集まり、みんながひとつのテーブルを囲んで、それぞれの思いをシェアしてもらったり、話したいことを語ってもらいます。がん患者さんもご遺族も同じテーブルで、それぞれの立場からの思いを語り合うのです。皆さん、「がん」という共通のテーマを通してその場に集まっているので、どこか根底に互いを理解しようという気持ちが働きます。そして、そういうことに慣れていない人にとっては、互いを理解できるように訓練できる場になると私は思っています。

対話に慣れてきた人は、人生を楽しんで生きようようになります。実際、「がん哲学外来カフェ」は多くのボランティアの人たちに支えられて成り立っていますが、皆さん、元がん患者さんやそのご家族で、今では明るく、自分の人生の目的や使命を見つけ出しています。使命といっても、世界を変えようといった大それたものである必要はなく、「毎日笑顔でいて周囲を明るくしたい」とか、「最期の瞬間まで一生懸命生きる」といったものでいいのです。

私自身は希望者に対し、個人的な面談をします。面談に来られた患者さんひとりひとりの顔を拝見して、お話をお聞きして、自分の脳の引き出しから、言葉を引き出すように「言

葉の処方箋」を出します。向き合っているうちに、相手の背筋が伸びてきたなと思ったらそれでおしまい。もう、患者さんの顔つきは変わっています。

人は“病氣”にはなっても、“病人”である必要はありません。病気を個性のひとつと見ることはできないでしょうか。雨が誰にでも降り注ぐように、病氣も誰にでも起こるものです。そうなったときにどう捕らえるか、どう生きるか、それが大切なのです。

私には師と仰ぐ人が4人います。「武士道」の著者で教育者の新渡戸稲造、政治学者で戦後初の東京大学総長の南原繁、思想家であり文学者の内村鑑三、経済学者の矢内原忠雄です。彼らの著書を繰り返し読み、私の生きる「基軸」ができました。私が面談者に出す「言葉の処方箋」は彼らから学んだエッセンスです。

現代人は、自分の使命だとか、何のために生きるのかなどについて、あまり考える機会がありません。そのため、病氣になったときに戸惑い、ハタと自分の存在価値に疑問をかけるようになるのです。がん哲学外来では、そうした人たちに自分の人生での役割を見いだしてもらえるような力をつけてほしいと思っています。人は自分の使命や役割を見つけると、人生に色彩が添えられたように変わっていきます。たとえ残された人生が短いものだったとしても、役割を見つけた後の人生は、それまでの人生とは異なったものとなります。そして、「自分の役割」は誰にでも必ずあり、それを追求するのが、“人生”だと私は思うのです。

樋野興夫（ひの・おきお）

1954年、島根県生まれ。順天堂医学部、病理・腫瘍学教授。一般社団法人がん哲学外来理事長。2008年「がん哲学外来」を開設。がんで不安を抱えた患者の間にある「隙間」を埋める活動を続けている。著書に『がん哲学外来へようこそ』（新潮新書）、『明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい』（幻冬舎）など多数。

◀ 前のページ 1 2

SNSでこの記事シェア



このページを印刷

PR

通常あまり見かけない、年収2,000万円以上の求人の特集

限られた土地を最大限に活用する3・4階建て住宅

がん、生活習慣病は、早期発見から予知・予防の時代へ

急成長を遂げた持ち株会社、Jトラストの社長に聞く経営哲学

「仕事で話せる英会話」ポイントは、英語の語順に精通すること